

**前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想**

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

**後期：キリスト教と社会理論——経済と環境**

3. 「神」の現在
  - 3-1：聖書の神と形而上学的神
  - 3-2：強き神と弱き神、その彼方へ
4. 聖書から経済・政治・社会
  - 4-1：聖書学と社会学
  - 4-2：聖書学から社会教説へ 11/18
5. キリスト教と経済学説
  - 5-1：ウェーバー・テーゼをめぐって 12/9
  - 5-2：近代経済学と神学——アダム・スミス 12/16
  - 5-3：キリスト教・資本主義・社会主義 1/6
6. キリスト教と政治理論
  - 6-1：現代思想のパウロ論 1/13
  - 6-2：イデオロギーとユートピア 1 1/20
  - 6-3：イデオロギーとユートピア 2

**<前回>強き神と弱き神、その彼方へ****(1)「弱き神」の系譜**

1. 近代以降の宗教批判：キリスト教思想における伝統的な神理解の再考  
ニーチェとハイデガーに依拠しつつ展開されているポストモダンの形而上学批判→  
キリスト教思想の脱形而上学化
2. 「弱き神」の系譜：ハイデガーからジャンニ・ヴァッティモやジョン・カプート
3. 「解釈の時代」（ローティとの共著『宗教の未来』に収録）
  - ・ニーチェとハイデガーの系譜に位置付けつつ、「解釈学の哲学的真理、すなわち、他の諸哲学よりも〈妥当〉であるとのその主張」から議論を開始。
  - ・「弱い思想」としての解釈学。解釈学的思惟は、あらゆる権威主義と絶対主義のなかで作用している形而上学的な真理の絶対性主張を断念し伝統に拘束された主体の継続的変容過程を承認する点で「弱い」思想であり、さらに、形而上学的思惟の諸前提を解体し主体を自由にする点で「弱くさせるもの」である——ニーチェのニヒリズムの意味における解釈とは解放にほかならない——。
  - ・「キリスト教を非宗教的に解釈すること」。
4. このニヒリズム（そして世俗化）のプロセスを限界づけるものが「愛」であり、キリスト教は自由への歴史的動向の推進力であるとともにその限界という役割を担う。
5. 弱き神への共鳴は、キリスト教思想自体の内部に確認できる。  
「ケノーシス」論（フィリピ二章六―八節）。

10. モルトマン：「十字架につけられた神」の神学的意義を論じ、カバラの「神の収縮」の議論の神学的意義を強調。
11. 波多野精一『宗教哲学』の構想：「力」の神からイデアリズム（「真」の神）を経て「愛」の神の人格主義へと展開する。遠藤周作：母なるもの、神の無力さ・沈黙。
12. 北森嘉蔵『神の痛みの神学』新教出版社、一九四六年（講談社、一九八一年）。
14. 「パウロと政治」という舞台で展開される政治哲学の議論。  
使徒パウロをめぐるのは、聖書学や神学はもちろんのこと、それを超えて、政治思想の連関での議論が顕著な動向となりつつある（イエス・ルネサンスからパウロ・ルネサンスへ）。
- ・ラカン派マルクス主義者ジジエク：「戦略を逆転すること」「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の襲撃に対して一致協力して戦うべきなのだ」「聖パウロ」（8）
17. ポストモダンという状況の共有、〈神〉理解において「愛」が鍵概念として機能。  
しかし、ジジエクの「脆弱なる絶対」は解釈学的系譜の「弱い思想」と同一ではない。
18. アガンベンの《ホモ・サケル》シリーズ。
20. 「法」に対する例外的なものという主権をめぐる問い。ジジエクでは、「超自我」という問題圏を巻き込みつつ、「法と侵犯との超自我的な弁証法」（Žižek, 2000, 142）の問題に接続。例外、過剰は法を宙吊りにするという論理。  
・「愛を通じて法と侵犯との超自我的な〈悪循環〉から脱け出すこと」（Ibid., 145）で
21. ポストモダンについての理解（したがって、モダンについての）、特にニューエイジ的ポストモダンへの批判的視点の有無。弱さ、愛という地点から、真理、隣人、そしてキリストについて「怪物的」（Monstrosity of Christ）へ、
22. 確かに、「欠如を抱えた、弱い存在だけが愛することができる。したがって、愛の究極的な神秘は、不完全のほうがある意味で〈完全よりも高い〉ということなのである。一方では、不完全で欠如を抱えた存在だけが愛するのである。われわれが愛するのは、すべてを知ら〈ない〉からである。他方では、たとえわれわれはすべてを知り得たとしても、愛は、不思議なことに、完成された知識よりもなお高いのである。おそらくキリスト教の功績は、愛する（不完全な）存在を究極的な完全さである神の位置にまで高めたことなのである」（ibid., 147）。しかし、このキリスト教は、「グローバルで均衡のとれた宇宙秩序のなかに、それとはまったく異質な原理を、すなわち異教的な宇宙論からみれば怪物的なゆがみ（monstrous distortion）以外のに何ものでもない原理を導入した」（Ibid., 120）と言わねばならない。
- （2）絶対性の新しい理解を求めて**
25. 「強い」と「弱い」の二項対立を越えた、「弱いけれども強い」「弱いところでこそ強い」と言える神（まさに「脆弱なる絶対」）。ポストモダンの多元的世界における〈神〉の可能性。
27. 自己完結的で特定の伝統や立場から空想された、強力な支配力で一切を体系的に統括する神ではなく、多様な伝統や立場からの影響を受けつつ、「脆弱なる絶対」「戦う普遍性」として機能する〈神〉。

## 4. 聖書から経済・政治・社会

### 4-1: 聖書学と社会学

1. テーマ：伝統的な自然神学の拡張と新しい宗教哲学の構築
2. 方法：聖書あるいは聖書学を起点にする
3. 聖書学の意義
  - ・キリスト教と経済・政治との接点
  - ・キリスト教思想と社会科学との接点
  - ・自然神学として機能する聖書学

創造論・終末論は、伝統的な自然神学の拡張にも関わる。

#### (1) 聖書学と社会学

4. 聖書学の基本的な方法論である歴史的批判的方法は、社会科学と結びつく。  
歴史の主体としての共同体 → 個と共同体の関係をいかに理論化できるか。  
歴史学的方法における「類比」の機能、解釈者の社会認識との類比
5. ブルトマンにおける様式史・「生活の座」の変容。  
社会学的な問いから、実存的問いへ → 社会科学的問題からの分離
6. 社会学的問いへの回帰
7. G・タイセン『原始キリスト教の社会学』ヨルダン社。  
「社会学的問題設定は、昔からある歴史的方法の一つ」(7)  
「旧約聖書学の内部では、今日でも依然として社会学的研究に決定的役割を果たしている、例のプログラム」「様式史と宗教史がそれである（グンケル）」(9)  
「歴史的な文脈を問うことと、社会的な「生活の座」を問うこととは、まったく同じ歴史意識からくる」、「新約聖書学がやや遅れて様式史を取り入れたという事情」(10)  
「奇妙だというのは、様式史にあった社会学的な萌芽がまともに開花することができなかった。それどころか、今世紀初頭に比べると、社会学的発想に対する関心も著しく後退してしまっただからである」(11)、「弁証法神学を契機として、聖書釈義は、テキストの神学的内容に思いをめぐらし始めたのである」、「テキストを」「教団の神学と教団の信仰の表現として解釈したいという要求を正当化してくれた」、「「生活の座」を問うということも、いつの間にか精神化されてしまった」、「ブルトマンが、新約聖書のテキストの実存論的解釈学を繰り広げたのである」、「社会的な関係は「非本来的なもの」に属し、人間の実存はこれを離れて「本来性」を求めなければならないというのである」(12)、「持っていた社会学的インパクトを帳消しにしてしまうような神学の思潮、つまり、弁証法神学と実存論解釈に結びついたからなのである」(13)  
「編集史的研究と新しいパウロ解釈は、新約聖書釈義を精神化する傾向を阻害するどころか、かえって促進することになった」、「編集史を徹底させて構造主義へと移る歩みである」(14)、「「反歴史的な」釈義」、「歴史的感覚になると、今は、世紀の変わり目の頃に比べて後退している」、「新約聖書学が古代学とのあの密接な結びつきを失いかけているということ、その兆候である」(15)  
「新たに生まれてきた社会学的関心から、原始キリスト教の社会学的研究にいたる道程は長かった。六〇年代の終わりから七〇年代初めにかけて、新約聖書学に関する方法の、研

究史上の状況は、社会学的問題設定にとってはなほだ不利であった」(17)

「「エレミアス」「ヘンゲル」、「古代学との徹底した関わりが、神学的研究の持つ精神化の傾向に対して防壁の働きをしているとの印象を深くする」(19)、「時代史が社会史に発展していったように、様式史の方も、文学社会学に広がって行かねばならない」(20-21)

「原始キリスト教文学は、宗教集団の文学であり、その生活との関連において理解しなければならないという、様式史の核心をなす洞察は、依然として生きている」、「様式史の特徴であるイエス伝承へのあのラディカルな歴史上の懐疑は、含まれていないということである」、「初期原始キリスト教にあつてはイエス伝承とそれが伝承された集団の生活との間に、ある対応関係が存在することを、方法論の上から前提するというだけである」(24)

「放浪巡回する伝道者や預言者や使徒の群れ」、「原始キリスト教の放浪のラディカリズムの誕生を歴史的に説明しようと思えば、歴史的に見て意味のある仮説としては、それは史的イエスにまで遡り、イエスからその刻印を受けたものだという仮説しかないのである」、「それまでとはまったく異なる、パレスチナの新しい社会的根こぎ現象の一つである」、「放浪のラディカリズムこそイエス伝承の最も重要な部分を担うものだ」「この仮定が正しいとすると、いわば社会学的にみて、史的イエスからその放浪巡回生活へと道が開かれる」(26)

「七〇年代初めの研究史の状況」「啓蒙主義的伝統がふたたび息を吹き返したのである」(36)、「過去の宗教的テキストを解釈して、現代における社会的行動の推進力にしたいという要求」(38)

「宗教社会学に寄せる関心は宗教理論なるものに寄せる関心でもあつた」、「それは解釈すると同時に説明する。また、解釈すると同時に再構成する」、「宗教理論が宗教批判と結びつくのはしかたがない」(40)

「理論的仮定」、「理解社会学、マルクス主義社会学、機能社会学である」(42)

「マックス・ウェーバーの理解社会学」「概念とか理論とかというものは現実の模写などではなく、現実を解釈し、測定するための道具であること」、「「理念型」という概念」(42)「支配の三形態の理念型による区部」「カリスマ的支配」「伝統的支配」「機能的支配」、「トレルチがキリスト教信仰の社会形態を、教会型、党派型、神秘主義の三理念型に区分したことである。これに促されて、原始キリスト教にもこの三類型に対応する社会形態、つまり愛の家父長制、放浪のラディカリズム、(グノーシス主義的)神秘主義を求めることになった」(43)

「社会学的枠組みの中で原始キリスト教を解釈しようとする試みを始めたのはマルクス主義者であつた」、「こうした研究も、理論的には二つの仮定をもうけるという点でマルクス主義の示唆を受けている」、「一つは「宗教意識なるものは非宗教的、社会的要因に依存するところが非常に大きい、という仮定」、「もう一つは、この非宗教的要因は葛藤によって特徴づけられるというテーゼ」(46)

「最初期のイエス運動の中核となつた社会層は中間層なのだ」(50-51)、「極貧人」「こういう人々はイエスの放浪生活を共にしないのである」、「原始キリスト教の巡回霊能者たちは、故郷を棄てた放浪生活に入ることで自発的な所有放棄と見なしている、というテーゼ」(51)

「宗教が非宗教的要因に依存するということ」、「一つには、宗教が社会の均衡維持に貢

S. Ashina

献するという意味」、「もう一つは社会の葛藤解決に貢献するという意味」、「この二様のモデル」(52)

「社会が宗教に及ぼす影響」、「機能主義のアプローチはむしろ逆で、宗教の社会に及ぼす影響を研究する」(54)

「第一のテーゼ」「意図と機能と別物」、「社会的効果というものは、意図された効果とはまったく別物」(54)

「意図が挫折する例」、「当初の意図とは矛盾した逆効果」「イエス運動の神殿批判」(55)

「コリント強者と弱者の葛藤と晩餐に関する争い」、「教会のこうした不平等の事実」(56)

「第二の理論的仮定は、統合のテーゼ」、「宗教は個人を社会秩序のうちに統合する」(57)

「宗教は一つの新たな象徴的コスモスの構築にとりかかる」、「象徴世界の背後にある社会的事実の分析」「知識社会学による分析」(58)

「身体的価値に欠けた人々」「社会的価値にかけた人々」「道徳的な差別を受けている者」、「ヘレニズムの原始教会にあっては、ユダヤ人と異邦人、富める者と貧しき者、健康者と病人、教養のある者とない者との間に幾分かは統合の傾向があること」、「この統合的社会形態をここでは「愛の家父長制」と名づける」(59)、「キリスト論的象徴は社会の分裂を克服しようとするこの傾向を表現している」(60)、「けれども、原始キリスト教会が現存社会を越えて一步踏み出すや、その象徴体系もまた原始キリスト教の現実を遙かに超えていく」「ユートピアさえをも構想されるのだ」(61)

「宗教に批判的研究」「今日の宗教に対する責任」、「われわれが宗教的に成人に達することに、手を貸したいと思うのである」(63)

## 8. 大貫隆 『福音書研究と文学社会学』岩波書店。

「I 新約聖書学と社会学——文学社会学的方法の位置と作業ステップ——」(1-83 頁)

「二 現代社会学における「実証主義」と「理念主義」

「三 G・タイセンの意図と方法」

「四 福音書の文学社会的分析」

「II ヨハネ福音書のための文学社会的分析のために——隣接理論との方法論的統合をめざして——」(85-143 頁)。「I」の理論のケーススタディ・適用

・実証主義（パーソンズ）と理念主義（ウェーバー）、+知識社会学（バーガー、ルックマン）、ハバーマス（批判的社会学・コミュニケーション理論）、オースティン（言語行為論）

↓

「聖書釈義にとっての方法論的適合性の問題」(15)

「H・N／フューゲン」

「G・タイセン」「構成的方法、分析的方法、比較による方法」

・タイセンの文学社会学とその問題点

・作業ステップの理念化

cf. 本講義での以前に論じた「解釈学的プロセス」の三重のミメシス

ステップ1＝歴史的・社会的状況の再構成、「編集の座」の推定作業

ステップ2＝テキストの構成の分析

ステップ3 = テキストの意味の分析

ステップ4 = テキストの効果の分析



ヨハネ福音書、ヨハネ共同体

## (2) 研究動向から

9. 土屋博 『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会：「牧会書簡」の共同体

大貫隆 『福音書研究と文学社会学』岩波書店：ヨハネ共同体

10. H・C・キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。

土屋博 『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会。

・「一九八〇年代に入ってから、H・C・キーによって、知識社会学の考え方を新約聖書研究に適用する試みが発表された。これは近年の新約聖書研究における社会的傾向にそったもので、いわゆる文学社会学的方法の一変形と見られるかもしれない。確かにキーはそのような流れを意識しており、実際著書の中ではタイセンの説をしばしば引用するが、キーとタイセンの間には、かなりはっきりしたが問題意識の違いがあるように思われる。タイセンもT・ルックマンやP・L・バーガーの理論に言及するが、いずれもさほど重要でない問題をめぐる言及にすぎず、理論の本筋をおさえてのとりくみではない。そもそも文学社会学というのはかなり多義的な概念であって、タイセンの理解はその中のひとつにすぎず、歴史的・批判的方法の補助手段として意図的に提示されたものである」(144)

「キーは、新約聖書の時代における生活世界の複数性を想定し、それに基づいて牧会書簡の特質を理解しようとする」、「次第に世俗的になっていく教団」(148)、「パウロと牧会書簡との間には、確かにずれがある」(149)、「表現形態が著者個人のみに戻せられるものではなく、著者の生きていた生活世界ともかかわっていることを指摘しようとするわけである。かくして、文学批評的アプローチは知識社会学的アプローチとふれ合うことになる」(150)。

・「こうして形成された教典は、宗教共同体内部で作用し続けることになる。著者は、この教典の機能を、牧会書簡の分析を通して明らかにしようとする。問題は、多様な歴史的現実の諸状況への教団の適応において教典に期待される機能と、牧会書簡に特有な、真正パウロ書簡を「模倣」しようとする論理であるが、その解明のために参照されるのが、知識社会学理論（とくに生活世界概念）を新約聖書研究へ適用するというキーの方法論である。著者はこれに文学批評的アプローチを統合することにより、キーの議論をさらに展開しようとする。その結論は次のようになる。「パウロと牧会書簡とのずれは、両者の時間的・空間的落差に起因するのではなく、むしろ共通の生活世界を基盤とするがゆえに生じたのではないかと思われる。そもそも宗教現象は、特定のカリスマ的人物だけで成り立つわけではない。そのカリスマに反応する信奉者たちがいて、はじめて教団が発生するのであり、そこではカリスマは、背後に横たわる生活世界の中へもどされた上であらためて受容される」(一五三頁)。牧会書簡は、市民倫理に従って生きている信奉者たちの視座からパウロを描いているのである。

では、教典がその背後にあった生活世界を超え、既存の文化の境界を越えて伝播するとき何が起こるのであろうか。著者は日本における聖書の受容を論じる中で、この点に迫る

S. Ashina

うとする。そのために取りあげられるのが、内村鑑三であるが、著者によれば、内村は「聖書全部神言論」という主張に見られるように、ファンダメンタリズムの「もの」としての聖書への固執（聖書崇拜）へあと一步の所にまで来ている。「内村自身は、それを慎重に避けようとした」（一六六頁）が、しかし、「書物としての聖書が教会のいわば代替物になっていく傾向は、内村の弟子たちにおいて一層明瞭になる」（一六八頁）。ここでの問題は、宗教生活における聖書の機能であるが、聖書は近代日本社会において、「近代化を推進するための心がまえをやや性急に模索していた当時の日本の知識階級」に対して、新たな生き方の規範を提示するものとして機能したのである。」

#### 11. Richard A. Horsley, *Sociology and the Jesus Movement*, Continuum, 1994 (1989)

Interest in the social concerns of biblical texts and use of sociological methods are nothing new, of course. Earlier in this century, in fact, interest in social issues and use of sociological method were strong and showing signs of sophisticated development within New Testament studies. In the United States in particular, the social gospel's concern for social justice and the early development of academic sociology converged in the Chicago School.

During the 1930s, however, European neo-orthodoxy and its emphasis on the revelatory word of God displaced the overly optimistic social gospel in the United States, and little was done for nearly fifty years to build on the work of Case, Matthews, and others in the first third of the century. (2)

sociological method

Hermann Gunkel's concept of *Sitz im Leben*

Bultmann's own highly influential theology focused narrowly on personal decision about one's "authentic existence."

The result in New Testament studies for most of the last two generations has been a sort of "methodological docetism, as if believers had minds and spirits unconnected with their individual and corporate bodies." Scriptural interpretation focused on religious ideas in its fundamental orientation toward the inner life of individuals.

Now, however, we are no longer satisfied with such an idealist individualist theological understanding of the biblical texts. We have rediscovered that biblical literature is about the problems and experiences of real people. (3)

Paul

In the Gospels there is little or no attention given to the salvation of individual souls and a great deal given to interpersonal and community relations including economic matters. ... The epistles are full of references to persecution of the early Christians and to conflicts between the leaders of the nascent movement.

new beginnings

for nearly two decades (4)

Partly because of the fragmentary evidence and partly because we are dealing with ancient historical realities, there may be problems in the compatibility of modern social scientific approaches and distinctive ancient historical data. (5)

Most sociological methods and models have been developed in analysis of modern European or American social phenomena. There may thus be a general problem of their suitability for analysis of ancient traditional societies and social phenomena.

The sociology of religion, however, was developed on the particular modern Western assumption that "religion" is a distinctive and even separable social institution (such as the "church"), differentiated from the political and economic dimensions of life and institutions in society (the "state" and business corporations). In ancient "biblical" societies, like most traditional societies, there was no such differentiation of the religious, political, and economic dimensions of society.

then priority must be given to the historical evidence and the sociological concepts or model adapted (or even abandoned) to avoid simply projecting modern social realities back into the historical (biblical) situations. (6)

As we have become aware of the "peril of modernizing" not only Jesus but New Testament communities as well, ... we have begun to recognize how strange the early Christian movements were. We have begun to recognize that they were "revolutionary," challenging the dominant cultures and ruling orders "through a powerful set of alternative values and behaviors." (7)

A final problem evident in some of the studies using social scientific methods is the substitution of a new form of abstraction. ... interpreters may substitute the abstractions of sociological theories and models.

Biblical interpretation should really become a two-way process of mutual criticism. Biblical studies has long espoused the ideal that the scriptural text is allowed to affect and influence the interpreter, even to call the interpreter's self-understanding into question. Anthropology apparently espouses a similar ideal: good cross-cultural methods require the interpreter to account for his/her own social location. It seems difficult to determine whether and to what extent this has actually occurred and what difference it has made heretofore in either biblical or anthropological interpretations of others' cultures. (8)

This study takes Gerd Theissen's Sociology of Early Palestinian Christianity as its starting point because it has been the most influential sociological treatment of earliest Christianity to date.

It also filled a scholarly and interpretive vacuum;

the Jesus movement

sociology of Knowledge, structural-functionalism

Theissen's presentation holds some promise. He has recognized that early Christianity was diverse.

In the most substantive and critical response to Theissen to date, John Elliott has identified some of the problems in Theissen's treatment. (9)

Theissen finds that the movement was a "failure," that it had no function in Palestinian Jewish society. Ironically, this means that what Theissen has demonstrated is that there is no point in pursuing any further a structural-functional analysis of "early Palestinian Christianity."

In so doing they illustrate the continuing problems identified above in sociological investigation and interpretation of the Jesus movement(s): i.e., the generation and interpretation of evidence



S. Ashina

and the (lack of) fit between modern social scientific models and ancient historical realities.  
(10)

the Synoptic Sayings Source, "Q"

Meaning is always contextual. Hence the standard scholarly practice of taking Jesus' sayings out of their out of their literary context in Q (or in pre-Q discourses, or in Mark or in pre-Markan discourses) leaves the meaning of individuals sayings completely dependent on the context supplied by the modern scholarly interpreter. The social context constructed is one of itinerant individuals alienated from social context, seemingly in direct dependence upon Theissen's "wandering charismatics."

The highly individualistic model thus constructed would appear to reflect the cultural alienation characteristic of modern intellectuals rather than the drive for social renewal apparent in Mark or "Q".

It is just such a projection of an anachronistic and inappropriate model onto nascent Christian movements that the other approach is at pains to avoid in its emphasis on using consciously constructed social scientific models.

to use Jesus' sayings and other New Testament data to illustrate the modern social scientific model (11)

the most striking continuity between both of the recent trends of interpretation and Theissen's provocative study is their common acceptance of the standard constructions of the principal component concepts, characteristics, groups, and background of ancient "Judaism" and "early Christianity." (12)

12. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*. Second Edition, T & T Clark, 2006.

Recent decades have witnessed the introduction of a wide range of new approaches into the field of biblical studies. Alongside the traditional focus upon historical-critical study has come a wide range of literary, social-scientific and other methods which have greatly diversified the discipline. ... social-scientific and feminist modes of interpretation

Since the early 1970s, the field of anthropology and sociology (106)

questions have been asked about the cultural, political and social world which the early Christian inhabited, about the relationship between the early Christian groups and the wider society within which they were located, about the kinds of people who joined the Christian movement, rituals and structures of the earliest congregations, about how power and authority were exercised and legitimated within them and so on.

Gerd Theissen, Wayne Meeks (107)

the general picture of social diversity within the Pauline congregations has been very widely accepted.

Justin Meggitt: the poor, the non-elite, of Roman society, close to subsistence level

they are all poor (108)

Meeks: baptism works as a 'ritual of initiation'... the Lord's Supper serves not only as a dramatized reminder of the story ... but also as a 'ritual of solidarity', binding the members of the

community together as one body in Christ (109)

the Pauline churches were communities in which conventional distinctions between Jews and Gentiles, slaves and free persons, men and women were transcended through the adoption of a new unity and identity in Christ, communities where all could participate fully according to whatever gift the Spirit gave them.... But it also seems clear that life in the churches fell short of the ideal vision, expressed in baptism and the Lord's Supper, that many different people had become one body in Christ.

Once again Theissen's work has been influential, and he has suggested one answer to the question concerning the social character of Paul's teaching. Taking up a proposal made many years earlier by Ernst Troeltsch, Theissen argues that the ethos of Paul's teaching can be summarized as one of 'love-patriarchalism.' (110)

there is some scope for claiming that Paul's vision is somewhat more radical and counter-cultural than Theissen allows. (111)

Until relatively recently, the subject of Paul's relationship to the Roman Empire was somewhat neglected, especially compared with the dominant (and important) topic of Paul's relationship to Judaism.

Recent years have, however, seen a renewed interest in the subject of Christianity and the Roman empire, and more specifically the New Testament and the imperial cult.

the work of the 'Paul and Politics' Group at the annual meetings of the USA-based Society of Biblical Literature, published in a series of volumes edited by Richard Horsley. Paul's political stance is often assumed to be rather conservative and conformist .... Here Paul seems to urge Christian to quiet submission to the state, ... A different perspective, however, is presented in the work of Horsley and his colleagues, (113)

#### <参考文献>

1. G・タイセン『原始キリスト教の社会学』ヨルダン社。  
Gerd Theissen, *The Social Setting of Pauline Christianity. Essays on Corinth*, Wipf & Srock, 1982 (1975).
2. 大貫隆 『福音書研究と文学社会学』岩波書店。
3. ウイリアム・G・ドーティ『原始キリスト教の書簡文学』ヨルダン社。
4. H・C・キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
5. 土屋博 『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会。
6. Richard A. Horsley, *Sociology and the Jesus Movement*, Continuum, 1994 (1989)
7. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*. Second Edition, T & T Clark, 2006.